

追悼 木佐木哲朗教授

## 木佐木哲朗先生を偲んで

笛木 杏奈

新潟県立大学国際地域学部教授、木佐木哲朗先生のご逝去に際し、謹んで哀悼の意を表します。大変恥ずかしながら、自らの大学卒業後はほんの数回メールのやり取りをただけでした。それでも今回、先生のことを耳にして何もしないわけにはいきませんでした。この論文集に載せていただけることに感謝しつつ、大学生生活4年間のことを思い出しています。

私が覚えている中で、最初の先生の記憶は初年度の「文章作成技法」の講義内で基礎ゼミの担当の先生を決める時でした。3114大講義室で数人の先生たちが自分の扱う題材のお話をされている中で、木佐木先生の特徴的なバンダナ姿は無視するにはあまりにインパクトがありました。当時のレジュメの端に似顔絵を描くほど強烈でした。ただそれだけではなく、講義の内容も私が大学入学時に学びたかった民俗学に近かったので嬉しかったことが思い出されます。結局基礎ゼミから始まり卒業研究も、先生のゼミに入れていただけることになり、4年間大変お世話になりました。

先生に講義の中で教えていただいたことはたくさんありますが、中でも私の中に残っていてふとした時に思い出すことが2つあります。

1つ目は「受け入れられなくても認めること」です。ある講義で捕鯨問題について考えることがありました。講義内でドキュメンタリー映像を見たあと、先生はどちらの意見が正しいと決めることが講義の目的ではないとして、自分がしていることを他人にもさせよう、他人もそうしないのはおかしいのではないかと自分の価値観を他人に強要すること口に出すことへの疑問を投げかけました。たとえ他人が信じて

いること、食べているものが自分の価値観と異なっていて受け入れられないと感じても、それが相手の価値観であり意思なのだから、それを認めることが大切だと教わりました。

2つ目は「本に書いてあること、誰かの発信した情報に疑問をもつこと」です。レポートのために何冊も本を読んでいる私たちにアドバイスとして教えていただきました。なんでもかんでも鵜呑みにせずに、なぜ筆者はこう考えているのか、根拠はどこかなど疑問に思っ調べていることが大事だということでした。

先生が教えてくれたのは論文の書き方とか自身の研究分野だけではなく、思い出すたびに襟を正されます。

木佐木ゼミは5日間沖縄にフィールドワークに行ってきました。卒業研究を進めていくうちに先生にかけてもらった言葉もいくつかあります。

私はいつまで経ってもメインテーマを決められず、ただ気になった文献を読んでいた。そんな時に先生から「このままだとあなたの本当の意見が伝わってこない」指摘を受けました。しかし同時に、論文の書き出しは自分の体験や経験から自分の思ったことが書いてあって読みやすい、こんな風に全体を書いてみなさいというように助言をいただきました。たった一言、どの生徒にも同じように言えることではありましたが、当時悩んでいた私にとっては雲の間から光が差すように「そうやって書き進めれば良いのか」と自信が湧いてきました。そうして最終的には琉球民俗社会における人々の死生観を扱うことに決めました。

フィールドワークで沖縄の波照間島に行ったときにみんなで自転車を借りて島中走り回りま

した。その時の先生がおっしゃっていたことも研究を進めるヒントになりました。波照間島は小さな島で、周りは海に囲まれていました。先生はこの島には山がないとおっしゃいました。私は島というものになじみがなかったので、周りに山がないことに違和感がありませんでしたが、その一言がヒントとなり、琉球、とりわけ島で暮らす人たちが身近な自然として海を挙げて、信仰の対象もまた海に関連しているということに気づくことができました。

先生は波照間島にいる間、琉球の伝統のミンサー織の文様のTシャツを着ていました。那覇市で行った居酒屋ではいつになく陽気に指笛を吹いていました。そうやって現地の方に敬意を払って接する姿を見るたびに、「私もこんな人間でいたい」と思わせられました。

社会人になった今、当時の卒業論文で自分が考えたことを振り返ると、勘違いしていたことがあったと思う記述もいくつかありました。しかし、当時そうとわかっていらっしやっただろうに、あえてそのまま論文を書かせてくださったところにも先生のお人柄が見えたように感じます。

普段の木佐木先生に関しては、皮肉も言うけれど、飾らない優しい方だと思います。私は勝手に第二の父のように慕っていました。いくつか思い出の中の先生を書き出してみようと思います。

講義中、生徒に意見を求める際にみんなが下を見て目を合わせないようにする場面で「じゃあ笛木さんどうなの」と声をかけられたことも何度かありました。当時は相当困惑しましたが、今となってはうれしい思い出です。

先生は学生玄関の外でよくたばこを吸っていました。初冬の寒い日に白い息なのかたばこの煙なのか、寒そうにしていたので「たばこは吸わないことにしよう」と決めたのを覚えています。

夏の雨の日や冬の雪の日、天気の良い日には折に触れて「僕は定年になったら絶対に故郷の

鹿兒島に帰る。新潟は一年中日が出ていなくて暗い。冬なんて朝なのに真っ暗だ」と新潟県の悪口ともとれるようなことを、よりによって新潟県立大学で堂々とおっしゃる方でした。

飲み会の際には「彼氏ができたら僕のところに連れてきなさい」と父親のようなことを言ったかと思うと「どうせ卒業したら会いに来てくれなくなるんでしょ」と弱気になったりする人間味のある面白い方です。

また、先生は私たちのレポートやレジュメ、卒業論文の原稿をよく読んでくださっていました。提出したものが返ってくる時は赤や青のペンでアンダーラインが引いてあったりコメントがついていたりしていました。「こうすればもっと良くなる」と言われているようで、それが私たちのやる気につながっていたのは言うまでもありません。

今回、ご縁があって木佐木先生の研究室の本をいただきました。ページの間に、その本にまつわる新聞の切り抜きが入っていました。それだけでなく、本自体にもアンダーラインが引いてありました。当たり前ですが、本当に先生の本なのだなとうれしく思いました。

私にとってこの追悼文を寄稿させていただくことは、先生からの最後の課題なのだろうと自分なりにとらえて取り組みました。先生からは、文化人類学を通して学問についての姿勢だけでなく、人間として社会とかかわる姿勢そのものも教えていただきました。私だけでなく、木佐木ゼミの誰もがそう思っています。フィリピンはボントックを始めとする木佐木先生の長年のご研究と、私たち生徒への温かいご指導ご鞭撻に感謝いたします。この国際地域研究論集と、私たちの心からの感謝が先生のいらっしやるところまで届くことを願っています。どうぞ穏やかな天気のところで大好きな焼酎を飲みながらゆっくりなさってください。ありがとうございました。

(新潟県立大学 4期生)